神戸新聞
KOBE SHIMBUN
（神戸）
'16.7.16

534

いま解き「細雪」＞中＜

検閲に屈しないタフさ

不透明さの問題、現代にも

文豪谷崎潤一郎（1886～1965年）が、零落する商家の4人姉妹を描いた上中下巻の長編「細雪（ささめゆき）」。文化の薫り豊かな物語世界で知られる同作は1943年、陸軍の検閲によって雑誌連載をわずか2回で中止させられた。

芦屋市谷崎潤一郎記念館の副館長で武庫川女子大名誉教授のたつみ都志（くに）さんによると、問題視されたのは、姉妹が演奏会に出掛ける前の場面。選んだ着物の帯が「キュウ、キュウ」と鳴るのを笑い合う、たわいもない一幕だ。

「時局に合わないという理由。要は、ぜいたく禁止です」。谷崎は屈せずに書き継ぎ、防空壕（ごう）にも持って逃げるほど原稿を大事にしたという。44年には自費で私家版の上巻を作り、知人らに配ったが、中巻は印刷頒布を禁じられた。たつみさんはこれらの行動に、先を見通す目と、権力の愚行などものともしない「タフさ」を見て取る。

「一代で財を成した商才ある祖父の血を引く谷崎は、根がマーチャント（商売人）だった。いずれ戦争が終わり、この作品が求められる日が来ると確信していたと思う」。私家版には、将来に向けた"プロモーション"の狙いがあった可能性も否定できないと話す。

上巻が中央公論社（当時）から刊行されたのは、終戦の翌年。人々は読みながら、戦争で荒廃する以前の日本の豊かさや美を懐かしみ、ベストセラーになった。

物語に政治色はなく、性愛の要素も他の谷崎作品と比べてむしろ少ない。「どの部分が規制にかかったのか、読んで言い当てられる人は少ないでしょう」と話すのは文芸評論家の末國善己（すえくによしみ）さん。その不透明さにこそ、検閲の本当の怖さがあると指摘する。

「何が引っ掛かるのか予測できれば、巧妙にそれを避けることもできる。しかし、いつ何が突如として網に掛かるのか分からないとき、多くの人は過剰に自主規制していってしまう。それは、表現規制が強まっている現代に通じる問題です」

岡山県に疎開中の谷崎潤一郎（右端）。ここでも「細雪」を書き続けた＝1945年（芦屋市谷崎潤一郎記念館提供）

文化 BUNKA